

他者評価に基づく探究的な学習における 自己肯定感・自己有用感の育成

片桐 治*・木村 吉彦**

(平成25年9月30日受付;平成25年11月5日受理)

要 旨

探究的な学習における自己肯定感・自己有用感の育成について研究した。小学校2年生の生活科における野菜栽培, 小学校5年生の総合的な学習における米作りを研究対象とした。探究的な学習の中で, いくつもの困難の克服や課題実現の価値を自覚させるため, 他者評価が得られる活動を設定した。その結果, 児童の自己評価シートにおける自己肯定感や自己有用感を意識する記述が多く見られるようになった。口頭による他者評価よりも, 可視化できる他者評価の実施によって自己肯定感や自己有用感を意識した記述をより多くすることが実現できた。

KEY WORDS

Inquisitive Learning 探究的な学習, Evaluation from Others 他者評価, Self-Affirmation 自己肯定感, Self-Useful 自己有用感

1 はじめに

2008年版「小学校学習指導要領」では, 総合的な学習の時間(以下, 総合と略記)の目標に「探究的な学習」という文言が加わった⁽¹⁾。また, 『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』では, 総合における探究的な学習を「問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動」とし, 詳細な説明が加えられている⁽²⁾。これは, 各教科と総合の違いを明確に示し, 今まで以上に探究的な学習を充実させるためだと考えられる。小学校低学年に設けられている生活科においても, 総合の前段階として, 積極的に探究的な学習を進める必要がある。

新潟県教育委員会は, 学校教育の重点で, 「学校生活のあらゆる場や機会において, 自己有用感の育成に努める」「学校, 家庭, 地域が一体となり, 人間関係づくりの能力や自己有用感等の育成に取り組む」と明示している⁽³⁾。これは, 生徒指導上の諸問題が頻発している現状を受け, 自己有用感等の社会性の育成を図り, 諸問題の解決を図っていかうとするものである。

東京都教職員研修センターが, 「自尊感情や自己肯定感に関する研究」を5年間かけて行った。その中で, 「自分の存在を受け入れてもらえない, 大切にされない, いじめられるなどの経験をした子供たちの自尊感情は低くなる。そして, 低くなった自尊感情を保とうとするために, さらに自分より弱い立場の他者に対して向かったり, 自分を守るために不登校やひきこもりなどによって社会との接点をもたなくなったりする。」と述べられている⁽⁴⁾。これは, 自尊感情や自己肯定感の低さと問題行動との関係を指摘したものである。

2004年に, 内閣府が行った第7回世界青年意識調査報告では, 日本の青年の自己肯定感は国際的に見てかなり低いと報告されている⁽⁵⁾。財団法人日本青少年研究所が2009年に行った調査でも, 我が国の中学生・高校生は, 米国・中国・韓国と比較して自分の能力に対する信頼や自信に欠けているという結果が出ている⁽⁶⁾。

これらのことから, 現在, 教育現場で頻発する子どもの問題行動の解決を図るためにも, 世界的に見て低いとされる自尊感情や自己肯定感を高めていく教育活動の推進が必要だと言える。

ここで, 前述の自己肯定感・自己有用感・自尊感情について整理する。自己肯定感とは, 「自分自身の存在に対する認識として, 自己の身体的な特徴や能力や性格などについて肯定的に考えたり, 感じたりする感情」⁽⁷⁾等, 研究者によって様々な定義がなされている。本稿では自己肯定感を「自分のよい面だけでなく, 苦手意識などを含め, ありのままの自分を受け入れ, 大切にしたい気持ち」と定義づける。

一方, 自尊感情もまた, 「ありのままの自分を受け入れ, ありのままの自分を大切にしたい気持ち」⁽⁸⁾, 「自分のできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者とのかわり合いを通してかけがえのない存在, 価値ある存在としてとらえる気持ち」⁽⁹⁾等, 研究者によって様々な定義がなされている。上記の定義づけは,

*上越教育大学(専門職学位課程)

**学校教育学系

私共の考える自己肯定感の定義と重なる部分が多い。また、榎本は、「自己の評価的な側面に自尊感情があり、その下位概念に自己肯定感があるものと思われる」とし、大きく異なっているのは自己への尊厳や尊敬の有無だと述べている⁽¹⁰⁾。これらを踏まえ本稿では、自尊感情ではなく自己肯定感という用語を用いて、述べていくこととする。

自己有用感については、「自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということを自分自身で認識すること」⁽¹¹⁾と定義する。

2 研究の目的

探究的な学習の充実を図っていく中で、自己肯定感・自己有用感をどのように育成していけばよいのだろうか。

東京都教職員研修センターは、「学習を通して『できた』『分かった』と実感をもてたり、先生や友達に『認めてもらった』『友達に教えることができた』と友達と学ぶよさを感じたりすることができたとき、子供の自尊感情や自己肯定感が高まる」と述べている⁽¹²⁾。栗木は、「子どもの『願い』を生み、『切実な問題』へと高め、それを自分の手で達成させることで、子どもの『自己肯定感』が高まる」と述べている⁽¹³⁾。榎本も、自己肯定感の形成要因の一つに、「他者から与えられた評価や評価的態度」を挙げている⁽¹⁴⁾。つまり、学びの中で失敗や困難を乗り越え、切実な問題を解決し、達成感や満足感を得て、それを他者から承認されたり、人の役に立てたという実感をもたせたりすることで自己肯定感が高まるのではないだろうか。

自己有用感について滝は、「感謝されてうれしい、頼りにされている、役に立っている、認められている。他者との交流で得られるそうした感情を『自己有用感』としている⁽¹⁵⁾。つまり、自己有用感は、学級、学校、地域等、児童一人一人が所属する集団の中で、自分以外の他者からありがとう、すごい等の感謝・賞賛・承認を受けることで高まると考えられる。

そこで、本研究では、探究的な学習の中で、児童がいくつもの失敗や困難を乗り越え、ようやく解決した課題に対して、他者評価が得られる活動を設定し、その後自己評価を行って、児童の自己肯定感や自己有用感にどのような変容が見られるか検討することを目的とする。

3 研究の内容と方法

3. 1 調査対象と調査期間

本研究における調査対象と調査期間は、次の通りである。

調査対象；新潟県上越市立S小学校2年生8名，生活科「みんなで食べよう しんせん野菜」

新潟県上越市立S小学校5年生10名，総合「今だから考える食の大切さ」

調査期間；2012年9月～12月

3. 2 指導計画

指導計画は、次ページの表1・表2の通りである。

3. 3 調査方法

生活科と総合で記述したワークシートを分析した。2年生については、学校行事「がんばり合宿」における振り返り作文，生活科「夏野菜を育てよう」におけるさつまいも提供後の振り返りシート，生活科「冬野菜を育てよう」における大根販売後の振り返りシート，合わせて3つの記述を分析した。5年生については、収穫したあおぞら米を食べてもらった後，集まった感想を読んだ直後に書いた振り返り作文と2学期のまとめの振り返り作文，合わせて2つの記述を分析した。

表1：第2学年生活科「みんなで食べよう しんせん野菜」指導計画

月	小単元名(時間)	目標	主な活動
4	○夏野菜作りの準備をしよう。(12)	○自分が育てたい夏野菜を決め、畑の準備ができる。	○野菜の種類を調べる。 ○育てる野菜を決め、畑の準備を行う。 ○二・七の市へ苗を買いに行く。
5	○夏野菜を育てよう。(10)	○自分で育てている野菜の様子を確認し、世話をするができる。	○野菜の生長を観察しながら支柱や肥料、草取りなど必要な世話をする。 ○食べ頃になった野菜を収穫する。
6			
7	○夏野菜パーティーをしよう。(6)	○育てた野菜を収穫し、野菜パーティーなどで喜びを表現することができる。	○収穫した野菜を使った料理について話し合い、計画を考え、実行する。
8			
9	○冬野菜作りの準備をしよう。(6)	○育てたい野菜の準備ができる。	○夏野菜の後片付けをする。 ○冬野菜を調べる。 ○育てる野菜を決め、畑の準備をする。
10	○冬野菜を育てよう。(7)	○みんなで育てている野菜の様子を観察し、世話をすることができる。	○野菜の成長を観察しながら草取りなど必要な世話をする。
11			
12	○冬野菜を販売しよう。(12)	○冬野菜パーティーのために、冬野菜の販売計画を立て、販売することができる。	○冬野菜の販売計画を立てる。 ○店頭や校内で販売を行う。
1	○冬野菜パーティーをしよう。(5)	○冬野菜を収穫し、お世話になった人々を招待して感謝の気持ちを表現することができる。	○お世話になった人々を招待するパーティーを計画し、みんなで協力しながら準備をする。 ○みんなで会食しながら、パーティーを楽しむ。 ○畑の後片付けを行う。
2			
3			

表2：第5学年総合「今だから考える食の大切さ」指導計画

月	小単元名(時間)	目標	主な活動
4	あおぞら米を作ろう(30)	○米作りの方法を調べ、自分たちの米作りに意欲をもって取り組む。	○米作りについて調べる。 ・家の人にインタビューしたり、インターネットで調べたりする。 ○米作り活動 ・田おこし・代かき・すじ蒔き・田植え
5			
6	米作りの過去・現在～農家の人たちの課題や工夫・思いを考えよう～(10)	○現在と昔の米作りの違いを調べる。 ○農家の問題点や農家の人の工夫・思いを考える。	○大規模農家の米作りの様子を見学したり、農家の人の工夫・思いについてインタビューしたりする。 ○昔の米作りとの比較を通して、現在の米作りの利点や問題点、工夫や思いを考える。
7			
8			生育状況の観察
9	あおぞら米を収穫しよう(20)	○米の収穫の喜びを味わい、もち米を使った料理に取り組み。 ○米作り体験を振り返り「食べる」ことの意味を考える。	○米の収穫 ・稲刈り・はさ掛け・脱穀・精米 ○米を使った料理を調べ、調理する。 ○募金活動と合わせて米の販売の計画を立て、販売する。 ○米作り体験を振り返り、生産者の立場から「食べる」ことの意味を考える。
10			
11			
12	食品ロスって何？～もったいないLIFEの提案(15)	○食品ロスの現状を知り、店・レストラン・家庭について調査する。 ○調査結果をもとに、それぞれの課題・方策について話し合い、「もったいないLIFE」を提案する。	○コンビニやスーパー、レストラン、家庭生活の食品ロスについて調査する。 ○それぞれの課題や方策について話し合い、自分たちのできることは何かを考えまとめる。
1			
2			
3			

4 実践と考察

4.1 生活科「夏野菜を育てよう」における他者評価

生活科「夏野菜を育てよう」では、なすやきゅうり、オクラなど一人一人が自分の野菜を決めて、栽培活動を始めた。おいしい実をたくさん収穫したいという課題を解決するために、その都度発生した問題を保護者や外部講師に聞き、解決しながら育てていった。そして、水やりや草取りなど日々のお世話をしながら愛情を込めて育てた野菜の一部は、7月に行われた1泊2日の学校行事「がんばり合宿」の食材として提供された。その際、全校児童や職員から「おいしい」「ありがとう」と、賞賛されたり感謝されたりした。その時の振り返り作文には次のような記述があった。

【「がんばり合宿」振り返り作文】

- がんばりがっしゅくで、ほくは火おこしたんとうでした。1日目にKさんからまきわりを教えてもらいました。むずかしかったです。火おこしのとき、木をあつめたり、火の中のところにいれたりしました。はいが目にはいり、たいへんでしたが、がんばってしごとをしました。火おこしをがんばったのでおいしいごはんができました。火をつけた先生がほくたちに火のつけかたをおしえてよくできました。よくできておいしいごはんをつくれました。火おこしのはいが目に入っていたかったです。 A児
- 夜は、くらくらしたら楽しくなりました。しゅくはくたいけんで、すいかわりが楽しかったです。はんのみんなに野菜を食べてもらってうれしかったです。 B児

A児は、担当であった火おこしを中心に記述している。やり方を教わり、目に灰が入りながらもがんばって仕事をした自分を認識していることが分かる。また、おいしいご飯が作れたことで、班の友達の役に立てたことも実感している。つまり、この活動を通して、自己肯定感や自己有用感を感じていることが分かる。しかしながら、提供した野菜に対しての記述は見当たらない。他の7名の記述も、多くはA児のようにカレーの調理体験や担当の仕事が記述されていた。提供した野菜についての記述は、B児1名だけであった。言葉がけによる他者評価の場合、情報が流れてしまい、子どもたちの記憶には残らないのであろう。

10月、夏野菜と同様に春から育てたさつまいもが収穫の時期を迎えた。広い畑の草取りは、暑さとかゆみで児童にとっては骨の折れる作業となった。ようやく育ったさつまいもを収穫したとき、子どもたちは自然と笑みを浮かべた。



図1：さつまいものバター醤油作り

そして、収穫したさつまいもをどうするか話し合ったところ、調理して全校に食べてもらおうということになった。調理する料理は、数日前にPTA行事で、2年生の保護者と一緒に作った、さつまいものバター醤油焼きである。その際、他者評価を設定する絶好の場と考え、全校児童・全職員に感想の記入を依頼しようと子どもたちに提案した。

当日、自分たちで協力して調理し、給食の一品として提供した(図1)。給食中に感想用紙を配付し、さつまいもの調理に込めた願いや感想用紙の書き方などを自分たちで説明し、給食後にカードを集めた。集めたカードには次のような記述があった。

【全校児童からの感想】

○家の10万倍おいしかったです。(5年女児) ○また作ってネ!!おいしかったです。(6年女児)

2年生はこれらの全校児童からの感想を読んだ後、振り返りシートに、この活動の感想を記入した。

【給食提供後の振り返りシート】

○2年生で作ったバターしょうゆを作りました。とてもおいしいバターしょうゆでした。すごくおいしかったです。バターとしょうゆのあじがとてもおいしかったです。M先生にとってもおいしかったねといわれてうれしかったです。Mさんにバターとしょうゆが入っているのと聞かれました。Iさんが作り方のメモをしてくれてうれしかったです。A児
○おいしいといってもらえてよかったし、みんなのえがおも見られてうれしかった。家でもつくってみたいというかんそうがほんとうにうれしかった。こころをこめてつくつたいものはじぶんでもおいしかった。また学校でだせるきかいがあればだしたいです。家でつくったときとどうちがうかためしてみたいです。バターとしょうゆであうんだなあと思いました。 B児

A児の記述から、自分たちで協力して作ったバター醤油がおいしくて、自分でも「すごくおいしかった」と達成感を感じていることが分かる。また、達成感を感じているその料理に対して、M先生に「おいしい」と言われ認めてもらえたこと、友達がその料理に興味をもち、質問したりメモしたりしてくれたことで、真に喜んでもらえたことと実感したことが推測できる。材料となるさつまいも作りを含め、A児はおいしい料理を作れたことで自己肯定感を高め、同時に人の役に立てたことを実感し、自己有用感を高めたとも考える。

B児は、「おいしいといってもらえてよかったし、みんなのえがおも見られてうれしかった。」と記述している。自分たちが作ったさつまいもとその料理を「おいしい」と認めてもらい、周囲を笑顔にし、自分も人の役に立てて「うれしい」と実感したことが分かる。これらの承認や実感は自己肯定感や自己有用感の育成につながっているものと考えられる。そして、「学校でだせるきかいがあればだしたい」からは、また、みんなに認めてもらったり、人を喜ばせたりしたいという次への意欲にもつながっていることが読み取れる。

他の6名の児童の記述からも、自己肯定感や自己有用感を認識すると考えられる記述が見られた。以下に、一部を抜粋して記述する。

- おいしくてお家のいもより10倍おいしかったという人もいた。(中略) ほかも食べてそう思いました。
- みんなおいしいというかんそうがあってよかった。
- みんなにおいしいと言ってもらえてよかったです。
- ほとんどの人が、「あまくてしょっぱくておいしかったです。」とかいてあったのでうれしかったです。
- あじつけもよかったと書いてくれてうれしかったです。
- 作り方をおしえてメモをとってくれる人もいました。
- 作り方やあじつけを聞かれて、心をこめて作ったからなんだなと思いました。
- ただだしてほしいと書いてあったので、また出したいと思いました。
- おいしいのができてよかったです。
- こんど家で作ってみたいと言ってくれてうれしかった。
- さつまいもを、作ってよかったんだなあと思いました。
- 2年生みんなで作ったさつまいもをバターしょうゆでやいたりあらったり切ったりして、それを全校のみんなや先生に食べてもらってうれしかったです。
- わたしたちが作ったさつまいもを全校のみなさんが、「おいしい」「あまいね」「こんど家で作ってみようかな」「作り方をおしえて」などのいけんが紙に書いてあって、とてもうれしかったです。
- さつまいものバターしょうゆやきは作ったことがなかったです。でも、上手に作れました。うれしかったです。
- T先生からこのさつまいもの作り方をおしえてくれないかと聞かれました。

1学期の「がんばり合宿」での野菜提供と比較すると、自己肯定感や自己有用感をより認識させることができた

言えるだろう。これは、他者評価を設定し、可視化できる形で感想をフィードバックしたことで、子どもたちの行為が価値付けられたためと考える。

4. 2 生活科「冬野菜作り」における他者評価

冬野菜も子どもたちの思いや願いを大切に野菜作りにしようと、何を植えるかの話し合いから始まった。話し合いの結果、大根を植えることになった。そして、草取り、畝作り、種まきを行った。途中、間引きを2回行った。抜いた大根は捨てずに洗って食べたり、大事に家に持ち帰ったりしていた。その姿から大根への愛着が伝わってくる。その後、水やりや観察など日々の世話を経て、3ヶ月後ようやく大根の収穫を迎えた。

子どもたちは、100本以上ある大根をどうするか話し合った。すると、「これまで栽培してきた野菜は、がんばり合宿やサツマイモで学校の人たちに食べてもらった。今度はもっと多くの人たちにほくたちが作った野菜を食べてもらいたい。」という意見が出た。そこで、自分たちが味わうパーティ用の大根は数本残し、残りは市内にある産地直売所の店先で販売することになった。



図2：大根販売に向けたちらし配り

販売活動では大根を売るだけでなく、「自分たちが作った大根の味の感想を聞きたい」という思いを受け、試食用の大根スティックを食べてもらい感想をインタビューしようということになった。また、「大根をたくさん売するために宣伝したい」という思いを受け、ちらしを作成して店先で配布する活動も行った(図2)。

販売するために、大根を洗ったり葉っぱを落としたりする活動も子どもたちの手で行われた(図3)。雪が降るあいにくの天気にもかかわらず、冷たい水で100本もの大根の泥を丹念に洗い流す姿が見られた。数分もすると手がかじかんで思うように動かないほどの作業だったにもかかわらず、全員で協力し、最後の一本



図3：雪の中で大根を洗い続ける子ども

まで丁寧に洗い続ける姿が見られた。

こうして迎えた大根販売当日、子どもたちは「売れるかな」「インタビューできるかな」などと不安な気持ちで販売を始めた。しかし販売が始まると、積極的にお客さんの元へと駆け寄り「試食どうぞ！味はいかがですか」とインタビューする姿が見られた。その場で、2年生のこれまでの頑張りを評価してくださる方もいた(図4)。

帰校後、販売の様子映像を見ながら振り返り活動を行った。「ポリポリ食べているね」「おいしいって言ってくれた」など、お客さんの声に鋭く反応する姿が見られた。その時の振り返りには次のような記述が見られた。



図4：大根スティックの味をインタビュー

- 今日、大こんを売りました。わたしはスティックを食べた人のおかどんなかおか見ていました。すると、食べた人たちは、みんなうれしそうでした。「じゃあ買うね！」という人もいました。大こんを育てているのに買ってくれる家の人もありました。食べた人たちは、「おいしい、おいしい、あまいね！」と言ってきてとてもうれしかったです。C児
- 今日、ほくたちの大こんを売りました。さいしょは買ってくれるのかなあというふあんもありました。でもひとりでもお客さんが来るとだんだんなれてきてよびかけやすくなりました。スティックの時、一番うれしかった言葉は「シャキシャキしておいしいです」という言葉でした。スティックを食べてもらって買ってもらうと、とびはねてしまいました。中には、とくばいの大こんを6本買ってくれた人もいました。それでほくはどんなりようりをして食べてくれるのが楽しみでした。 D児

C児は「わたしはスティックを食べた人のおかどんなかおか見ていました。すると、食べた人たちはみんなうれしそうでした。」と記述している。言葉だけではなく、人の表情をもとに相手を喜ばすことができた実感している

ことが分かる。直接のコミュニケーションを経なければ得られない、この活動ならではの喜びを感じ取っているのである。また、「じゃあ買うね!」からは、自分の行動により、大根販売に貢献することができ、役に立つことができたことと実感していることが伺える。さらに、大根を家で栽培している人まで購入してくれたことから、自分たちが栽培した大根はおいしいのだと自信を深めたことや、「おいしい、おいしい、あまいね」からは、大根の味を直接賞賛してもらい、自己肯定感が増したことも推測できる。

D児の記述からは、最初は不安で思うようにできなかったけれど、経験を積むことで上手く話しかけることができるようになった自分の成長を認識したことが伺える。また、スティックを試食してもらった際に、「シャキシャキしておいしいです」と感想を聞くことができ、大根の味に自信をもったことが伺える。さらに、試食後に大根を買ってもらえたことで、大根の味を認めてもらえたことと販売に貢献できたことの喜びが重なり、とびはねるほどの姿で感情を表現するまでに至ったと推測する。

これらの記述以外にも、自己肯定感や自己有用感を認識したと考えられる記述が見られた。以下に、一部を抜粋して記述する。

- おばあさんに「おいしいですか?」と聞いたら、「あまくておいしいよ」とこたえてくれました。うれしかったです。
- いろんな人に買ってもらえてうれしかったです。
- 知らない人も、ちらしを持って来てくれてとてもうれしかったです。
- かぞくの一人が(大こんを買いに)いけば、かぞくも食べられて、多くの人に食べてもらえたかなあとと思います。
- ししょくがかりをしました。たべてくれたときはうれしかったです。
- とくばい大こんをぜんぶ買ってくれた人がいました。その時は、うれしくてとびはねそうでした。
- 中大こんは一本ずつ買っていく人が多かったです。でも、いっぱい売れてよかったです。
- ぜんぶの大こんが売れたときはものすごくうれしかったです。
- すごく売れてよかったです。
- たくさんの方が来てとてもうれしかったです。
- みんなで声を出してがんばって売れました。
- ししょくの時にいろいろかんそうを言ってもらえたのでよかったです。
- ししょくがやくに立ったんだなあと思いました。
- めあてのもっと多くの人に食べてもらうことができすぎてうれしかったです。

子どもたちの記述から、試食後に感想をインタビューする他者評価の場を設定したことで、自己肯定感や自己有用感をしっかりと認識させることができたことが分かる。さつまいもの時の他者評価と比較すると、より幅広い他者から客観的な評価を得ることができた。また、言葉だけでなく相手の表情からも評価を感じることができたようである。コミュニケーション不足と言われる時代に貴重な活動であると考えられる。さらに、試食の評価が大根の販売につながる点も大きい。大根をおいしいと認めてもらい、さらに購入してもらうことで、より大きな喜びを感じることができていた。

今回は、インタビューの様子をビデオ撮影し、自己評価をする直前に児童全員で視聴した。これは、お客さんの大根に対する情報を共有したり、自己の経験を想起させたりすることに役立った。音声での情報は流れやすい。このような工夫をすることで、他者評価をしっかりと子どもたちにフィードバックできると考える。

その後、生活科の授業の中で、2年生が大根販売で得たお金をどう活用するか話し合った。すると、「大根栽培でお世話になった方々への感謝の会の材料費にあてる」「学校で必要な用具を買う」「被災した東北の方にお金を送る」「材料を買って、東北の被災者に品物を送る」という4つの意見が出された。全ての意見が、誰かのために何かしたいというものである。大根の販売を通して多くの方の役に立てたことで自己有用感が高まった姿ではないかと理解する。

4. 3 総合「米作り」における他者評価

一般的に小学校で行われている米作りの学習は、田植え、草取り、稲刈りが主な作業である。それ以外の田起こしや水の管理、肥料などは田の所有者等に依頼して行ってもらっているのが現状である。

しかしながら、S小学校の米作りは全てが児童の手に委ねられている。今年度も、5年生10名で田起こしから草取り、水の管理まで自らが主体となって取り組んできた。子どもたちにとって米作りは大きな困難がともなった。その苦勞が分かる子どもの作文を紹介する。



図5：稲刈りをする子どもたち

○…五年生になってから、すじまき、田おこし、代かき、田植え、草取り、稲刈り、はさがけ、だっこく、もみすりとお米作りのいろいろなことをがんばってきました。わたしは、田おこし、稲刈り、だっこくを一番努力してきました。田おこしは、5日もかけていっしょうけん命、努力しながらやりました。去年のかぶつをほりおこすのは、とても大変でした。…
E児

このような半年にわたる作業の結果、ようやく米を収穫するまでとなった。稲刈りも保護者や職員にボランティアを依頼し、一日がかりで無事に終えることができた(図5)。

その後、収穫した米をどうするか話し合った。すると、「お世話になった保護者と会食する」、「給食で全校のみんなに食べてもらう」、「文化祭で販売し募金と合わせて被災地に送る」ということになった。

保護者との会食で出された献立は、児童の考えたものである。児童は個々に伝統・彩り・栄養・バランス・旬の食材・その料理が持つ意味・料理時間・手間・相性・見た目を調べ、プレゼンでその献立のアピールポイントを強調して発表した。中には、家で米粉を作り、クッキーを焼いてアピールする児童も見られた。献立は、和洋中様々な提案がなされたが、さつまいもご飯、わかめとねぎの味噌汁に決まった。当日は、お米の味も味わおうと塩おにぎりも用意され、お世話になった保護者と楽しいひとときを過ごした。

また、文化祭であおぞら米を販売した。1kg500円で30袋と募金箱が用意された。販売前から列ができ、わずか3分で全て売り切れた。大盛況に子どもたちは大喜びであった。売り上げと募金は合わせて2万円を超えるものとなった。収穫したお米と合わせて被災地へ送られた。

これら2つの活動を行うに当たり、他者評価を設定した。保護者や地域、被災地の方がお米に対する感想を記入できるように、学校のメールアドレスを記入したワークシートを配付していたのである。保護者や地域からは8通、被災地から1通(図6)の感想が寄せられた。

【保護者や地域から送られてきた手紙】

- 皆さん方の努力のおかげでとてもおいしい青空米をいただきました。風味もよく粘りもよかったです。来たる来年もおいしい青空米を作ってください。楽しみにしております。ごちそうさまでした。
- はさがけ米はコシがあって、一粒一粒が白く輝いてしっかりした味でおいしかったです。おかわりしました。
- 青空米早速炊いて食べてみました。おいしかったです。冷めても粘りもあっておいしかったです。5年生の孫達が暑中ががんばって作ったお米、じっくり味わって食べさせていただきました。
- …家族皆でいただいた感想は、つやがあってよい味だったよとのよい結果をもらいました。皆の努力が実ってよかったですね。あおぞら米ばんざい。これからも、皆仲良く頑張ってくださいね。…

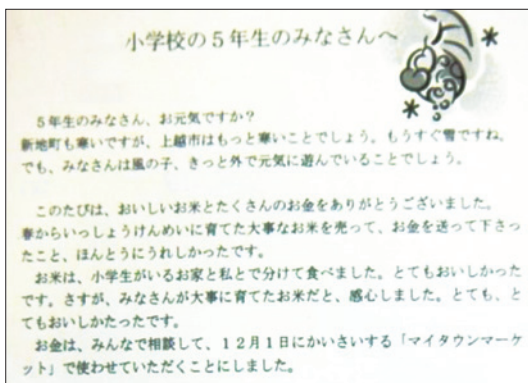


図6：被災地からのお礼の手紙



図7：お礼の手紙を読み合う子どもたち

5年生に届いた手紙を全員で読み合った後(図7)、振り返りを記入した。すると、次のような記述が見られた。

- 今日、わたしたちがつくったあおぞら米を食べた方からのメッセージを読みました。お手紙は、「9通」も届きました。S町のMさんからもきました。お手紙に「おいしかった」とかいてありました。とーでもうれしかったです。S町では、お米とお金が役に立ってよかったです。(中略) 本当に、お米を作っていてよかったです。おいしいと言ってもらえるとさらによかったなと思いました。
(F児)
- 今日、ぼくたちがつくったあおぞら米を食べた方からのメッセージを読みました。ぼくたちがつくった米は、売ってよかったです。売ると言い始めたことは、ちょっと気持ちが進まなかったけど、文化祭で売ったときは、完売が3分ほどだったんで、そのときはびっくりしました。Mさんのところにもお米と文化祭で売った売上金とば金のお

金を送ったら、「マイタウンマーケット」ということに使っていただけるのだなと思ったら、売らなくなかったけど、今は売ってよかったなと思いました。文化祭の時に、売ったのは、8つのご感想を返してもらいました。夏の暑いときもがんばってよかったなと思います。たぶん来年もやるので来年もがんばりたいです。がんばってよかったあ。おいしい米ができたあーと思います。(G児)

F児は、被災地のMさんから「おいしかった」と味を褒めてもらい、大いに喜んだことが分かる。また、被災地の役に立ちたいという思いで募金活動を頑張っていたF児は、Mさんからお米とお金が役立ったと聞き、実際に貢献できたこと、この瞬間に感じたと思われる。そのことで、これまでの活動の価値に気付き、お米を作っていてよかったなという記述に至ったと考える。「おいしいと言ってもらえたらさらによかったなと思いました」にあるように、この他者評価の設定で、その思いをさらに強めることができたことが分かる。

G児は、大切に育てて収穫した米を売ることに、気が進まないと言っている。しぶしぶ販売活動を行ったのであろう。しかし、米の販売で、Mさんに送ったお金とお米が役立ち、その思いが変わったと言っている。つまり、他者評価を設定したことで、自分たちの活動が価値付けられ、プラスの感情に一変したことが分かる。さらに、保護者や地域の方からのメッセージを読むことで、これまでの苦労を思い浮かべ、それを頑張り抜くことができた自分に気付いている。そして、大変だったことをもう一度がんばり、もう一度同じ思いをしたいという気持ちが伺える。最後の「がんばってよかったあ、おいしい米ができたあー」という叫びは、自分がんばれた、おいしいお米を作れたのだという自己肯定感が高まった姿と考える。

他の児童も自己肯定感や自己有用感を認識したと考えられる記述が多数見られた。以下、一部を抜粋して紹介する。

- わたしたちがつくったあおぞら米を食べた方からのメッセージを読みました。私は、「ありがとうございます」と「うれしい気持ちで」いっぱいになりました。なぜかという、一生けん命つくったお米をたくさんの方に食べてもらって、たくさんメッセージをいただいたからです。
- いろんな方からのメッセージを読んで、「作ってよかったな」と思いました。「うれしいな」と思いました。募金したお金も「マイタウンマーケット」に使ってくれて、助けになれてよかったです。
- 風味もよくねばりもよくおいしかったと書かれていてうれしかったです。
- 皆さんが「ねばりがあって」や「つやがあって」、「輝いていて」、「とても美味しかった」など、たくさん感想が書いてあって、うれしかったです。
- いろいろなメッセージをいただいて、がんばってあおぞら米を育ててきてよかったなと思いました。これからもいろいろなことをがんばっていききたいです。
- 今まで努力して、たくさんの方々に食べてもらってよかったです。たくさんの方々がたたくてできた米なので、ほくもおいしいと思えました。また来年もお米をつくりたい気持ちになりました。またおいしいお米をつくってみんなによるこんでもらいたいです。
- マイタウンマーケットに使うそうです。役に立ってよかったです。味もとても美味しかったそうです。
- あおぞら米のメッセージをたくさんもらってうれしかったです。とてもおいしかったというメッセージが多くてうれしかったです。がんばってお米をつくってよかったです。

2年生と同様、5年生でも可視化に基づく他者評価を設定したことで、曖昧だった相手の思いを知り、自身の活動に価値を見出し、「頑張り抜いた自分」・「おいしい米を作れた自分」という自己肯定感や「人を喜ばすことができた自分」・「人の役に立つことができた自分」という自己有用感を自分自身で認識できたようである。

2学期末にまとめの振り返り作文を書いたところ次のような記述があった。「全部自分たちでやったんだということがうれしかったです。」「お家の人もみなさんがおいしいと言ってくれました。メッセージを見たときはとてもうれしかったです。」少し時間を経ても、しっかりと記憶に残っていることが分かる。

2学期の終業式で、5年生のH児が学年を代表して2学期の振り返りを発表した。内容は総合の米作りであった。「大変だったけど、みんなにおいしいと言ってもらってうれしかった…2万円を超えるお金を集め、寄付することができた…寄付も喜んでもらえた」と述べた。これは、総合の他者評価の内容と一致する。感動や実感を伴った学びはしっかりと記憶に残り、成長した自分を振り返る材料となっていた。

5 成果と課題

子どもたちは探究的な学習の中で、主体的に課題を解決していく。学習が深まるにつれ、解決に困難が積みまとう

課題になってくる。そして、困難な課題になればなるほど、それを解決したときの達成感や満足感は大きい。この時に自己肯定感が高まるのだろう。その際、他者評価を設定することで、無自覚だった子どもたちの行為が価値付けされ、より強く自己肯定感を認識することが本稿で示唆された。また、その困難な課題が人の役に立つものや人を喜ばせるものであれば、自己有用感も認識されるようになる。活動を終え、ただ振り返りをさせるより、本実践のように可視化される形で、他者評価を設定することがより有効である。学年を問わず、可視化に基づく他者評価がもたらす効果は大きい。

総合を中心にして行っている探究的な学習では、各教科に比べ、より広い他者とのかかわりを設定しやすい。本稿の実践では、全校、全職員、保護者、比較的近い地域から県外を越える遠い地域まで、幅広くかかわりをつくることができた。そうした様々な他者から、子どもたちの行動を価値付けてもらえることは、より強固な自己肯定感や自己有用感の育成につながると思う。

しかし、現場は多忙を極めていいる。そのため、教師主導の探究的な学習に陥りやすい。与えられた課題では、大きな達成感や満足感は得にくい。また、時間に追われているため、他者評価の場を十分設定できずに活動を終えることが多い。口頭による評価に頼りがちな面もある。年齢が小さいほど、振り返りを記入する前に忘れてしまう可能性が高い。多忙な中でも、子どもたちの自己肯定感や自己有用感の育成を強く意識し、子どもの学びを可視化できる形で価値付けていきたいものである。

なお、本研究は小規模校での実践である。中規模校や大規模校における実践も積み重ねる必要がある。また、自己肯定感や自己有用感の育成は、日常生活の様々な場面と大きく関係している。探究的な学習における他者評価の設定だけでなく、他にも様々な要因が残されていることも推測される。さらに、児童の特性により、自己肯定感や自己有用感の育成にも違いがある可能性があるため、児童の個性を視野に入れた分析が求められる。

【引用文献等】

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領』2008, p.110.
- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』2008, pp.13-14.
- (3) 新潟県教育委員会『学校教育の重点』2012, p.2.
- (4) 東京都教職員研修センター「子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【基礎編】」2011, p.4.
http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/bulletin/h22/materials/h22_mat01a_01.pdf
- (5) 内閣府「第7回世界青年意識調査」2004.
<http://www.cao.go.jp/youth/kenku/worldyouth7/html/no4-1-943-49.html>
- (6) 財団法人日本青少年研究所「中高校生意識調査」2009.
<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/research/index.html>
- (7) 山崎秀則・片上宗二編『教育用語辞典』ミネルヴァ書房, 2003, pp.220-221.
- (8) 上越教育大学附属小学校『自尊感情が高まる道徳教育と総合学習 自分をまるごと好きになる!』明治図書, 2010, p.9.
- (9) 前掲(4), p.2.
- (10) 榎本博明『自己心理学の最先端』あいり出版, 2011, pp.133-138.
- (11) 北島貞一『自己有用感—生きる力の中核—』田研出版, 1999, p.3.
- (12) 東京都教職員研修センター「子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【発展編】」2013, pp.22-23.
http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/bulletin/h23/materials/h23_mat01a_01.pdf
- (13) 栗木隆正「自己肯定感を高める生活科学習の理論と実践に関する研究」, 愛知教育大学生生活科教育講座『生活科・総合的学習研究第11号』, 2013, pp.97-104.
- (14) 前掲(10), p.133.
- (15) 滝充「規範意識の形成と教師の指導力」, 教科教育研究所編『C S研レポートVol.55』, 2005, p.12.

Rearing of Self-Affirmation and Self-Useful in the Inquisitive Learning be based on Evaluation from Others

Osamu KATAGIRI* • Yoshihiko KIMURA**

ABSTRACT

I researched on rearing of self-affirmation and self-useful in the Inquisitive Learning. My object was the cultivation of vegetable of second elementary schoolchild in Living Environment Studies, and the cultivation of rice of fifth elementary schoolchild in Integrated Studies. In this Inquisitive Learning, for schoolchildren's awareness to the worth of overcome of difficulties and realization of subjects, I set activities getting evaluation from others. As a result, I could see a lot of description based of self-affirmation and self-useful in children's self-appraisal-sheets. I could realize more representations based of self-affirmation and self-useful by visualizing evaluation from others than by oral evaluation from others.

* Joetsu University of Education (Professional Degree Program)

** School Education